

学生海外調査研究	
唐代長安城に関する現地調査	
古内 絵里子	
比較社会文化学専攻	
期間	2011 年 9 月 2 日～2011 年 9 月 13 日
場所	中華人民共和国陝西省西安市・北京市
施設	大明宮跡、興慶宮跡、含光門跡、延平門跡、薦福寺、慈恩寺、青龍寺、外郭城壁跡、中国社会科学院、北京大学、国家博物館、首都博物館、故宮博物院

内容報告

1. 海外調査研究の必要性と目的

修士論文では、日本における古代都市の成立というテーマで研究に取り組み、七世紀の「みやこ」の実態を考察した。その研究結果としては、古代日本では、七世紀の初めまで大王宮自体を「みやこ」とみなしていたが、七世紀半ばの孝徳朝に「みやこ」が大王宮の周辺までをも含む空間に変化したことを明らかにした。さらに、大王宮周辺空間の現出要因が大化改新の官制変化と評制施行という二つの政策にあることを解明した。そして、大王宮と周辺空間によって形成された「みやこ」が七世紀後半の天武朝から都城という中国の「みやこ」の形態に整備された要因について分析を加え、これら七世紀の「みやこ」についての都市成立過程の歴史のなかでの位置づけとその意義を解明した。

この研究を進める中で、七世紀後半に造営された藤原京以降の「みやこ」の形状は、『周礼』の考工記や唐の長安城を模倣しているが、以下の相違点がある。

①行政制度の相違

唐では、城の内外問わず州県郷里制が敷かれていたが、日本では都を一つの行政領域とする独自の行政制度が敷かれた。したがって、日本は唐の都の形状をそのまま継受したのではなく、そこに日本独自の構造やシステムを導入していた。

②構造上の相違

長安城をはじめとする唐代の都は四方を城壁で囲んでいたが、日本の都には四方を巡る城壁がなく、平城京では、京城南面 4.2km のうち羅城門の両側 100m のみ築地塀が設けられていただけだった。城内の坊という区画についても、長安城などでは坊牆という壁で四方を囲んでいたのに対し、日本の都では坊はあるものの、それを囲む壁が存在しない。

これら①②から、都に対する統治形態・理念はまったく異なることに関心を抱いた。当時の日本が長安城のどの部分を継受し、逆にどこを継受しなかったのかを逐一比較検討することで、日本の都の特質・独自性を解明することができるのではないだろうか。

そこで、今後は日本古代における都市の展開を研究するつもりである。そのため、

(1) 日本古代の京城空間の変遷

(2) 日唐における京城空間の比較検討

(3) 古代東アジア世界における日本古代の京城空間の位置付けと史的意義

という三点から研究を進めていく。

(1) では、七世紀後半から始まる藤原京造営から平安京、そしてその後の都城制解体までの約四百年にわたる京城空間の制度や実態の変遷を分析し、その形成・展開過程を解明する。

(2) では、日本古代の京城空間のモデルとなった中国の長安城と洛陽城を研究し、日唐における京城空間の制度と実態の比較を行い、その共通点と相違点を考察する。

(3) では、(1) (2) の研究を踏まえて、文献史料と考古資料の両面から日本の京城空間の特質と創出要因を検討し、最終的に古代東アジア世界での日本古代都市の位置づけと史的意義を明らかにする。

この研究の(2)である「日唐における京城空間の比較検討」を行うためには、唐代長安城の規模・構造を把握する必要がある。したがって、中国西安市に残る唐の長安城の遺構や遺物などを自身で調査しなければならない。また、長安城の精密な研究を行うには、中国にしかない文献史料や最新の考古資料のデータの収集・検討することが必須である。

そこで、今回の海外調査研究では、長安城の規模や構造を明らかにするため中国陝西省西安市の唐代長安城址に点在する寺観や大明宮などの各遺跡で実測調査を行った。また、北京市では、先端の歴史研究を行う中国社会科学院の歴史研究所、北京大学、中国国家博物館、故宮博物院に行き、日本では手に入らない長安城に関する文献史料の収集を行った。

2. 調査の成果

2.1 唐代長安城址調査

唐代長安城は、隋の開皇二年（582）に造られた大興城を唐が受け継ぎ長安城に改名した都である。この地域は、前漢の首都となって以後、五胡十六国の前趙・前秦・後秦、南北朝の西魏・北周など唐代以前の諸王朝の首都でもあった。唐代長安城の規模は、東西 9.7km、南北 8.6km の長方形の形状でこの四方を城壁で囲み、十二の門があった。城内は道路によって碁盤の目に区切られた坊という区画が 100 以上あった。この坊も四方が坊牆という土壁で囲まれ四つの門があった。城内の中央北寄りに宮城、その南に皇城がつくられ、皇城の南東と南西にそれぞれ東市・西市が設けられた。このように、長安城は都市計画に基づいていた都であった。また、唐末の戦乱で破壊されるまで約三百年間、唐朝の政治・経済・文化の中心地であった。

今回はその唐代長安城の中でも遺構が残る大明宮跡、興慶宮跡、皇城跡、含光門跡、延平門と外郭城壁跡、薦福寺、大慈恩寺、青龍寺で現地調査を行った。

2.1.1 大明宮

大明宮は、唐代長安城の東北、禁苑の東南部分に位置し、城内で最も規模が大きい宮殿であった。貞観八年（634）に太宗が造り始めたが、太宗の死により造営が中断された。その後、龍朔二年（662）に高宗が病にかかり、当時の宮城であった太極宮が卑湿であるため、ここに移り政治を取るようになった。その後唐代末期まで宮城として存続した。

発掘調査から東壁が 2614m、西壁 2258m、北壁 1135m、南壁 1675m の台形型の宮城であり、四方を宮壁に囲まれていたことが判明した。宮内は正門である丹鳳門、正殿である含元殿・宣政殿・紫宸殿、玄武門が宮の中軸線上に配置される構造であった。この宮城の構造は、だいたい『周礼』にいう「前朝後寢」制にしたがって、前半分は朝廷政務区で、後半分は皇帝らの生活区であった¹。この大明宮は奈良時代の平城宮の構造にも多大な影響を与えた。現在、大明宮址は大明宮国家遺址公園となり、主要な建物が復原されていることから、今回はその遺構や博物館を見学した。

まず、丹鳳門を見学した。丹鳳門は大明宮南面正門で、龍朔二年に建てられた。日本では朱雀門に相当する門である。丹鳳門は、単に門としてだけでなく、赦令の頒布や宴会が行われ大典の重要な場所でもあった。この門は、2005 年から 2006 年にかけて発掘が行われ、五つの門道、隔牆、墩台、馬道、城壁が確認された。現在、丹鳳門は復元され丹鳳門遺址博物館となっている。博物館内部には、門の鴟尾や板瓦、瓦当、鉄釘、版築で造られた城牆の外部を覆う磚などの出土遺物が展示してあった。また五つの門道と隔牆の遺構が展示されており、門道は全て幅 9.4m、南北 33m であり、隔牆の幅は約 3m であった。門道制は日本の門には見られない制度であり、階級ごと通る五つの道が決まっており、真中の道は皇帝専用の道であった。

次に正殿部分を見学しに行った。大明宮の正殿部分である朝廷政務区画は含元殿・宣政殿・紫宸殿を中心として、建物を対称に配置して、東西三つの垣によって前朝・中朝・内朝の三区画に分けられていた²。

含元殿は、丹鳳門の北 160m の位置にあり、正殿の中で最も重要な建物であった。龍朔三年に建てられた。含元殿は前朝の中心建物で、その東西に左・右金吾仗院や東・西朝堂などが置かれていた³。発掘調査から含元殿殿堂は東西 76.8m、南北 43m、高さ 3.46m であることが判明している。含元殿の右には翔鸞閣、左には棲鳳閣があり、飛廊でこれとつらね、いずれも平地より四十余尺高いところに建てられた⁴。日本の大極殿に相当するが復元された基壇を見たことにより、規模の大幅違いを把握することができた。また、復元基壇から朝廷部分を見てみると日本の宮城の朝廷に比べて、規模に対して小さな印象を受けた。そして、含元殿の北裏には磚瓦窯址あった。磚瓦窯址は宮内に二十基あり、宮内の城壁、門、道に大量に使用されていた磚は宮内で造られていたことが今回の調査でわかった。

次に、宣政殿は含元殿の北 300m の位置にあり、龍朔三年に造られた。殿の規模は東西約 70m、南北 40m 以上で、その両側に宮牆があった。この建物は、中朝の中心建物であり、新帝即位、冊封太子、科挙殿試など重要な政治の場であった。この殿の遺構からは真っ直ぐ南には含元殿がよく見え、これら建物が大明宮の中軸線上に並んでいることを確認できた。

最後に、大明宮の北面正門である玄武門を見学した。この門には、東西 34.2m、南北 16.4m、幅約 5m の門道が一つと、両側に高い門樓基があったことが発掘調査で確認されている。現在、玄武門も復原されており、門道の高さは馬車も余裕で通れるほど高かった。また、門は内部は土をつき固め、

表面を磚で覆っていたものであった。

その他、大明宮址では、宮城内で一番高い建物であった望仙台址や、紫宸殿址、麟德殿址などを見学した。時間がなかったため宮殿内の主要建物しか見ることができなかったが、それでも規模の大きさを実感することができ、文献史料からは窺い知ることのできない大明宮の荘厳さと構造を理解することができた。

2.1.2 興慶宮

興慶宮は、外郭城の興慶坊に位置する。興慶宮は開元二年（714）に離宮にされ、同十四年（728）に北隣の永嘉坊、東隣の勝業坊の二坊の地の半ばを析いて拡張して宮内が大々的に整備され、十六年に一応の完成した後、玄宗はここで政務を執り行った⁵。天宝十二年（753）には、沉香亭・勤務政務本樓・花萼相輝樓などの建物が建てられた⁶。現在は公園となっており沉香亭と龍池が復原されている。このような外郭城にある宮は、日本でも八世紀後半の長岡京の東院などが確認されている。

2.1.3 含光門

現在の西安市の中心部は明代の西安城壁に囲まれている。1986年の調査でこの西安城の南城壁内に唐代の含光門が残存していることが確認された。含光門は皇城の南面城壁に開く3つの城門のうち、正門である朱雀門の西方にあった門であり、現在、西安皇城牆含光門遺址博物館としてその遺構を展示している。発掘調査によって、門の基壇の規模は東西37.4m、東西19.6mで3つの門道が判明している。日本でいえば大内裏を囲む宮垣に相当する。日本では藤原宮の宮垣は一本柱塀、平城宮以降は築地塀であったが、この含光門と皇城壁は土をつき固め、表面を磚で覆った荘厳なものであった。

2.1.4 延平門跡と外郭城跡

外郭城壁は外郭城の東西9.7km、南北8.6kmを囲む城壁である。日本では羅城と呼ばれるが、日本の都城では南面の羅城門付近のみ築地塀が確認されており、都城全体を囲むものではなかった。発掘調査で確認されている残高は0.7～1.5mであることから、高さは2mであったと想定されている。城基は場所により異なるが多くは9～12mで、3～5mの部分もある。また門址付近では20m近くの厚さが確認されている⁷。今回は、その中でも延平門と長安城の西にある待賢坊から永和坊に接する外郭城壁址を現地調査した。

2.1.5 薦福寺・慈恩寺

小雁塔は現存する唐代の磚塔であり、現存する数少ない唐代長安城の建物である。この塔は、安仁坊西北隅の薦福寺浮図院にあった。薦福寺は嗣聖元年（684）に創建された。小雁塔が建立されたのはその約20年後の景龍年間（707～10）に建てられた。建立当初の塔は十五層の高さ88.2mであった。

唐代長安城内の現存するもう一つの建物は慈恩寺にある大雁塔である。慈恩寺は、貞觀二十二年（648）に高宗が皇太子時代に母の文德皇后の供養のために再建した寺院である。元果院や太平院等の塔頭を含み、建物の全体は1897間、三百人の勅度僧という大規模寺院であり、長安城の東南の晋昌坊の東半分を占めていた。インドから帰国した玄奘三蔵が上座として迎えられ、翻訳院で大部のサンスクリット仏典を漢訳しており唐代長安城の代表的寺院の一つであった⁸。大雁塔は、永徽三年（652）に玄奘三蔵がインドから持ち帰った仏像や經典を保存するために建てられた磚塔である。高さは67.4mであった。

2.1.6 青龍寺

青龍寺は新昌坊の4分の1を占める大寺院で、創建は隋開皇二年（582）で、はじめ靈感寺とあった。その後、龍朔二年に城陽公主が観音寺とし、景雲二年（771）に青龍寺に改名された。空海、円行、円仁、恵運、円珍、宗睿など日本人僧侶が学んだ寺としても名高い寺院であったが、北宋以降、荒廃し廢寺となった。

現在の青龍寺は近年再建されたものだが、発掘調査により、北門、殿址、塔址などの遺構が確認されている。遺構図・遺物は現在の寺院内に展示スペースがあり、仏頭、蓮華紋瓦当、獸面紋瓦当、筒瓦、鴟尾、手印紋磚、蓮華磚、石經幢殘片、經幢頂、緑釉陶碗、三彩象座、緑釉帶蓋水盂などを見ることができ、当時の隆昌を窺うことができた。

2.2 北京市における史料調査

北京市では、中国社会科学院、北京大学、国家博物館、首都博物館、故宮博物院に行き、唐代の史料や資料を収集した。

2.2.1 中国社会科学院

中国社会科学院では、歴史研究所に行き天聖令の研究会に参加した。天聖令とは、宋代の令つまり法典であり、1999年に載建国氏の「寧波天一閣藏明鈔本《官品令》考」（『歴史研究』1999-3）により寧波天一閣博物館に北宋天聖七年（1029）編纂の天聖令写本の存在が判明した。その中に、唐の開元二十五年令と目される不行唐令があることから、長年不明だった唐の具体的な令を知ることが可能

となった。この天聖令には、都に関する条文も数多くあることから、今後、唐代長安城を研究する上で欠かすことができない史料である。参加した研究会では、倉庫令の不行唐令四条を検討した。この研究会には、中国社会科学院の先生方をはじめ、北京大学、中国法政大学、中国師範大学などの大学院生が参加しており、活発な討論が行われていた。また、日本の天聖令の研究とは違う視点から令と唐の実態についてアプローチしており、今後の天聖令を研究していくうえで大変参考になった。研究会終了後は、中国社会科学院内の隋唐宋元史研究室や付属図書館を案内してもらい、数多くの貴重書を見させていただいた。中国の歴史研究の最先端機関に行くことができ、とても勉強になった。

2.2.2 北京大学

北京大学では、付属博物館に行った。この博物館には北京大学考古系が収蔵した中国各時代の遺物が展示してある。真桶形匣鉢装焼、青釉子母杯盤など唐代の陶器をみることができた。また北京大学図書館には多くの唐代に関する史料や本があり、貴重な史料を得ることができた。

2.2.3 国家博物館

国家博物館は、中国を代表する博物館であり、唐城の貴重な遺物を数多く収集している。その中でも 1972 年の新疆吐魯番から出土した「餃子・点心及食具」という唐三彩の模型は、当時の菓子や食器の形などがよくわかる遺物であった。また、陵墓などの陶俑や壁画が数多く展示してあり、文官・武官・女官などの唐代の服装などがよくわかった。このように、唐代の遺物からその時代の生活様式を知ることができ、長安城での生活の一端を知る良い資料を得た。

2.2.4 故宮博物院

故宮博物院は、明から清朝にかけての宮城であった紫禁城である。この紫禁城は、正門である午門—太和門—正殿（太和殿・中和殿・保和殿）—内廷—神武門が宮の中軸戦上に配置されている。清朝の宮城であるが、先述した大明宮にみえる「前朝後寝」制が残っており、中国の宮城の構造がよくわかる。この「前朝後寝」制は日本の宮城でも七世紀から確認され、孝徳朝の難波長柄豊碕宮も宮門—前殿—後殿があり、その後の宮城であった後飛鳥岡本宮・近江大津宮・飛鳥浄御原宮・藤原宮にも、その構造が引き継がれた。すなわち、中国の宮城構造は、外郭城の構造より早く日本に伝わったといえる。

3. 今後の研究計画

今回の調査研究では、(2) の「日唐における京城空間の比較検討」を行うため、西安における唐代長安城の遺構と北京での史料収集を行うことができ、多くのデータを得ることができた。今後はこの海外調査研究で集めた史料やデータをまとめ、唐代長安城の構造・実態を解明していく。また、七世紀後半から中国の都城制に倣って創出された藤原京、平城京、恭仁京、難波京、長岡京、平安京が造られた飛鳥から平安時代までの約四百年間に京城空間の変遷を分析し、日本古代都市における京城空間の形成過程を研究していく。それらの検討をした上で、日唐の都市の比較を行い、古代日本の都市の特質を明らかにしていく。

その研究成果を踏まえて、日本が「京」制度を創出した要因を研究し、日本古代の京城空間の特質を解明する。そして、古代東アジア世界での日本の都市の位置づけと史的意義を明らかにする。

注

1. 何歳利・馬彪(訳)「唐長安大明宮発掘の成果と課題—考古学の新成果と興安門遺跡の発掘と研究」『アジアの歴史と文化』10,34.
2. 前掲 1 参照.
3. 前掲 1 参照.
4. 佐藤武敏 (2004) 「唐の長安」『長安』講談社 163-164.
5. 徐松・愛宕元(訳) (1994) 『唐兩京城坊攷』平凡社 51.
6. 前掲 4,130.
7. 徐松・愛宕元(訳) (1994) 『唐兩京城坊攷』平凡社 68-69.
8. 前掲 8,102.

ふるうち えりこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

古内さんの修士論文は優秀な内容で、日本の古代都城史上における 7 世紀半ばの前期難波宮の画期

性を文献史料と考古学資料の双方を使って明らかにしたものだ。

博士論文においては、古代における都市の展開を、7 世紀後半の藤原京以降の都城における京城空間の形成過程を辿ることによって探求していくことにしている。その際、日本古代の都城のモデルとなった中国の都城と比較する視点が欠かせない。今回の海外調査研究によって、古内さんは唐の長安城の大明宮や城壁、門、寺院跡などの遺跡を実地に調査し、大きな成果を得ることができた。

また、日本の都城が行政制度上、京職によって把握されるのに対して、唐では、長安城の内外問わず州県郷里制が敷かれていた。古内さんは、この行政制度の違いについて、近年発見された新しい史料である天聖令を用いて論証しようとしている。今回の海外調査研究で、北京の中国社会科学院歴史研究所における研究会で天聖令について最新の研究成果に触れることができ、研究者との交流ネットワークを築くことができたことは大きな成果であり、今後、博士論文作成に活かされることが期待できる。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・古瀬奈津子)

